

挨拶



会長就任のご挨拶

会長 本 島 修

核融合エネルギーの平和利用を目的として1958年の第2回 IAEA-FEC がジュネーブで開催されてから50年、研究の進展を確認するための第22回記念大会が、同じジュネーブで昨年開催されました。研究が半世紀を経た51年目の今年、核融合懇談会を出発点とするプラズマ・核融合学会の会長をはからずも拝命することになり、会員の皆様と関連の学会など関係者の皆様のご指導とご協力を得て、当該分野の発展に微力を尽くす所存であります。どうぞよろしくお願いたします。

昨年、松田慎三郎前会長の下で核融合研究50周年記念事業が実施され、記念特集号『我が国における核融合の歴史と将来展望』の発刊、原子分子データ集の出版活動、宇都宮大学川田重夫教授を現地実行委員長とする第25回年会において核融合研究50周年記念シンポジウムが盛大に執り行われたこと等は記憶に新しいところです。この50年の間の研究の進展は目覚しく、エネルギー開発研究を包含するわが国のビッグサイエンスの一翼を担う研究分野に成長していることを広く一般社会と異なる種々の研究分野へ発信する良い機会となりました。

当該分野の研究には、学術的な幅広い視野と科学と工学のインテグレーションが強く求められます。したがって、20年前に遡る学会創設時に、プラズマ・核融合学会とされた先輩諸氏の慧眼に改めて感心するとともに深い感謝の念を持っております。学会は、本来幅広い人材の集団から構成され、その基本機能は参加型でなければなりません。また、会費を納めていただいている以上、本来ゲゼルシャフト的に活動すべきものと考えます。したがって、当学会は、「プラズマ」および「核融合」分野を車の両輪と位置づけ、幅広い知見と考え方を包含しながら学会活動を推進して参りたいと考えております。「プラズマ」研究については、プラズマ基礎から応用までの学術研究のさらなる発展に資するとともに、新たな境界領域の創生をめざさねばなりません。プラズマ分野の研究からの参画を全体の半分程度に持っていければ素晴らしいことです。「核融合」研究・開発については、本格的に動き始めた ITER や幅広いアプローチ活動への学会活動を通しての貢献をめざし、デモ炉を見据えた研究基盤の構築に重点的に取り組むことの一助になれば学会の存在意義がさらに高まるものと思えます。サイエンスを進めるにあたっては、ロバストネスとリダンダンシーを併せ持つ2軸構造が必要になります。学会は、この2軸構造の構築に大変大きな役割を持っていると言えます。

そのため、学会の一層の活性化は最大の課題になります。学会の講演会としての活動（年会、秋季講演会）が年間1回の年会だけとなって10年以上を経過しており、会員アンケート等を通して年会活動のあり方についての意見を集約し改善に取り組むべきことは、総会でも承認いただきました。学会活動の国際化に向けての取り組みは、平成18年（2006年）発刊の英文論文誌 Plasma Fusion Research (PFR) の国際論文誌としての実績作りを継続することが重要です。当該分野のアイデンティティを高めるためはもちろん、必ずや当学会員の利益にもつながることと信じています。最終的には、論文誌の国際的な評価を得るためのインパクトファクタ獲得が目標となります。研究領域の拡大をめざした学協会との連携の強化と社会に対する科学啓発活動の強化なども会員の皆様のご協力を得て進めていければと考えております。

最後に一つお願いがあります。それは、公益法人制度改革への対応と学会運営の改善です。昨年12月から始まった公益法人制度改革に対応して、特例民法法人（現段階での当学会の法人名）から一般社団法人認可に向けての移行手続きを進めます。したがって、学会運営を規定する定款の制定や公益事業に

よる事業費支出計画（公益目的支出計画）等を作成し，法人移行申請の準備を進め，この制度改革が学会の発展に資するよう結果を出さねばなりません．会員の皆様のご理解を賜りたいと存じます．

冒頭に書きました，昨年（2008年）の第22回記念大会 IAEA-FEC では，光栄にもサマリーをする機会をいただきました．私のプレゼンテーションを聞いてくださった会員の方も多数いらっしゃったと思いますが，そこでの結びの言葉は"The Dream is Alive."，"Now Fusion Energy is an Achievable Goal!"としました．最初の文はスペースシャトルの打ち上げの成功をテーマとする NASA の記録映画のタイトルからとりました．後者は私の当該分野に対する正直な自己評価と期待の言葉です．この心で，2年間の会長の任期を努めてまいりたいと考えます．皆様どうぞよろしくお願いいたします．